

2020/10/19

(うと Q 世話し 交流とはお互いの差違を楽しむ事也)

前々前回の記事では「同調圧力軍団」、前々回では「嫉妬心」そして前回の記事では「嫉妬心」の裏に「疎外」が隠されていたのではないかと推測致しました。

そこで今回は更にその推測を進めてみようと思います。

無反応、無接点が生み出す「疎外」

では、その反対語はといたしますと

「反応 (あり)」「接点 (あり)」

となります。これは換言すれば「交流、やり取り」即ち

「コミュニケーション」

しかし、ここで問題が。

反応がいいものであれば、OK

接点がジャストポイントでお互いを侵食し合わなければ、これまた OK。

しかし、反応が悪いものであったり、お互い、左右から相互に半円を描いた接点が重なりあったりしていたら、領土不可侵条約違反で、争いの元になる。

しかし、よく考えてみれば「反応がいつも 100%いい」とか「常に接点が付かず離れずギリギリのジャストを維持している」などという状態は、人間界、いや自然界にすらあり得ません。

反応は常の好悪両方ですし、接点は深く交わったり離れたりの不安定極まりない繰り返しが、それこそ「常態 (ノーマル)」です。

それが「常態 (ノーマル)」なのに、我々はいつの頃からか「自分への反応は常に 100%いつも好反応」とか「1mmでも自分の半円内に交わってくれば、それは侵害行為」だと思ひ込まされてこなかったでしょうか？

そんな極めてレアケースが「常態 (ノーマル)」なのだ。

我々が、もしそれを探していたのだとすれば、そしてそれが「無い」と騒ぎ、不条理だと騒いでいたのだとすれば、それは「あり得ない解を求めて」の完全に無駄な抗議の時間を過ごしていた可能性があります。

仮に「反応は好悪両方ある」「接点位置不動不変など皆無。侵害、離散が常」なのが「常態 (ノーマル)」なのだと思えば「不平」「不満」「不条理」感の量も変わるような気がするのですが。

「自分が 100%もない。代わりに相手の 100%もない。50 対 50 の半々で、相半ばする」

だから残り 50 を貸したり、借りたりして助け合う。それが「新常态 (ニューノーマル)」嫉妬心はじめ「争い」は個々に「差違」がある事から生じます。

全く同じ金太郎飴であれば、争いはなくなりますが面白くもおかしくもない。

だからお互いの差違を認め受け入れ、その「差違」を楽しむ。

それが「ニューノーマル（新常態）」になれば嬉しい事この上なし、でございます。